



島田桂子、『ディケンズ文学の闇と光』

Keiko SHIMADA, *Darkness and Light in Dickens' Works*

(161 頁, 彩流社, 2010 年 8 月, 本体価格 2,100 円)

ISBN: 9784779115486

(評) 宮川和子

Kazuko MIYAGAWA

モラルとは後天的に得られるものであろうか、それとも生まれつき人間に内在するものであろうか。怒りや悲しみ、同情といった感情はモラルと結びつくのであろうか。宗教とモラルはどのように関係するのであろうか。島田桂子氏の『ディケンズ文学の闇と光』はこうした諸問題について考える好機をわたしに与えてくれた。序で氏は「モラリストとしてのディケンズではなく、芸術家としてのディケンズを支える信仰について」追求し、「キリスト教作家」としてのディケンズを捉えるという目的を明らかにしている。モラリストの側面を排除したディケンズ芸術、モラルから切り離れたキリスト教とは一体どのようなものなのであろうか。

本書の内容に入る前に、まずモラリストとしてのディケンズについて今一度確認しておきたい。ディケンズはよく「センチメンタル」な作家と言われ、いわゆる「知識人」たちから軽蔑的に扱われる傾向がある。しかしながら、カプラン (Fred Kaplan) は『聖なる涙』(Sacred Tears, 1987) で、ディケンズの「感傷」が、人間に内在するモラルと深く結びついていることを指摘し、「センチメンタリズム」の道徳的効用を論じている。ディケンズは、社会の底辺で搾取されている貧民たちを描き出し、読者の心の中にある「同情心」「悲嘆」「怒り」といった純粋な感情を引き起こすことで、社会制度改革を促進したのである。では、このモラルは宗教とどういう関係にあるだろうか。布教活動という名目のもとに植民地支配を押し進めてきた大英帝国の歴史、現代ではテロリズムへの報復に「聖戦」という言葉を使い、中東国の罪のない人々を大量殺戮した米国元大統領、そしてローマ教皇の児童虐待のスキャンダルといった現象を思いおこすとき、制度的な宗教が必ずしもモラルとは両立しえないと考えざるを得ない。ディケンズが作品の中で、制度と結びついた宗教の偽善性を暴き教会や聖職者を風刺したのも、彼がモラルを重視する作家であったことの証明であろう。

本書では、こうした制度としてのキリスト教とは別に、精神的な信仰そのものをディケンズ作品の中に純粋に追求しようと試みる。氏は、制度を超えた壮

大な宇宙的枠組みの中で神と信仰の問題を徹底的に論じ、救いや赦し、そして復活といったテーマをディケンズ作品に見出している。

それでは本書の内容を順番に検討したいと思う。まず第一章「チャールズ・ディケンズーアンビヴァレントな人間像」では、ディケンズの宗教的背景と悪人を描くことへの執念について論じている。クイルプやクルック、フェイギンといった悪人が悲惨な最期を迎えるプロットについては「必ず悪は滅び、善が勝利する」という旧約聖書のエホバのような厳しさを見ている。一方で、サイクスによるナンシー殺害シーンでは血の描写を通じ、罪の深さと悪の恐ろしさを表現し、ディケンズが読者に教訓を与えているとする。

第二章以降、氏は具体的な作品分析に入り、「善と悪の対立」では『ピクウィック・クラブ』、『オリヴァー・トウィスト』、『骨董屋』を論じている。ピクウィックの物語に「自分が賢いものだとうぬぼれてはならない。誰に対しても悪をもって悪にむくはず、すべての人に対して善を図りなさい」という新約聖書の言葉が、メッセージとして隠されているのだと指摘し、聖書とディケンズとのインターテクスト的關係を指摘している。第三章「ヴィクトリア朝のバビロン」では『デイヴィッド・コパーフィールド』を論じ、アグネスとステイアフォースが「善き天使」と「悪しき天使」として、さらにカンタベリーとロンドンに「エルサレム」と「バビロン」のように神聖な地と墮落の地として対照的に描かれていることを指摘している。デイヴィッドがステイアフォースによって墮落の世界へと引きずり込まれずに、人生の荒波を乗り越え、泳ぎきることができたのは、アグネスという安全網があったからであると論じ、「罪を犯す者たちの転倒した無秩序が神の摂理を損なうことはできなかった」という真実が描かれているのだとする。

さて、第四章「ディケンズによる罪と罰」では『荒涼館』『リトル・ドリット』分析に入る。『荒涼館』分析ではジョーの死の場面への言及がある。「ジョーの死は、あらゆる人間の無責任と利己主義による犠牲の象徴」と論じ、すべての人間が大法官裁判所だけではなく、「人間よりも大いなるかたの手による」審判の前に立たされているとする。さらに氏は『リトル・ドリット』論で、エイミーとクレナム夫人の和解の場面に言及し、罪の告白とその赦しを通じて、新しい自分が生まれるという解釈を与えている。

最後に、第五章「回心と赦しへの希望」では『二都物語』と『われらの共通の友』が取り上げられている。ディケンズの『二都物語』執筆目的を、「歴史ではなく、寓話的物語、あるいは神話を書くこと」としている。その神話のテーマとは「復活」であり、それはシドニー・カートンがチャールズの身代わりとなって命を捨てる場面にあらわれているとする。この「再生・復活」のテーマは

『我ら共通の友』にも現れていることを指摘している。とりわけ水を浄化と生命の象徴として扱うという宗教史上しばしばみられる現象が、『我ら共通の友』における川の扱い方に見られると論じている。

このように氏の著書を読んでいくうちに、制度悪を暴くモラリストとはちがった、「キリスト教作家」としてのディケンズ像が浮かびあがってくる。信仰を純粋な形で取り出して、作中人物やプロットに投影させることで、見事に芸術とキリスト教を融合させるディケンズの作家的手腕を明らかにしている。

では最後にほんの少し苦言を呈することをお許し願いたい。ディケンズを第一級のモラリスト作家であると捉えている一読者から見ると、制度的なキリスト教への批判が論じられていないのはやはり物足りない。氏が「キリスト教作家ディケンズ」を論じる以上、ディケンズのモラリストとしての側面をもう少し取り上げて欲しかった。たとえば、本書では扱っていない作品『エドウィン・ドルードの謎』では、ジャスパーが二重人格の聖歌隊長として描かれ、聖職者の偽善性が攻撃されているのはどういうことなのか。氏は『荒涼館』のジョー少年に言及しながら、ジョーが信仰や教会について全く無知であるという点、ジョーの天国での救済を信じ読者が安心できたとしても、信仰や教会が現実の世界でジョーを救済できるか否かという問題について追求していない。これらの制度批判や信仰への疑念といった点を深く掘り下げていけば、本書はさらに充実したものとなったであろう。



Captain Cuttle and Florence  
From a nineteenth-century American edition